



杖桑拾葉集
改正
自廿卷
至廿二卷

伊地知文庫
文庫20
361
3



能勢文庫

伊地知氏書冊

伊地知氏書冊

目錄

牙二卷ノ
小國紀行

法中竟魚

口
海道記

正廣法師

牙二卷ノ
志之卷ノ

權左信於人致

口
一は草紙序

同

口
上りしめと序

同

牙二卷ノ
種玉篇次抄序

家祇法師

口
百人一首抄序

同

梅もくももきりけら〜あやめ
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

あまこけり月〜い〜い〜い〜い〜い

い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

ま山れ麓ととて 越中れあ〜い〜い〜い

昔まねなら〜い〜い〜い〜い〜い

ゆ記よ清とあ跡を強れお

田子れ浦といにちる〜い〜い〜い〜い

ちりよとま〜い〜い〜い〜い〜い

ま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

田子れ浦を〜

遠〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

夏あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い

〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

早柳川を〜い〜い〜い〜い〜い

早〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

長〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

早〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

六月十三日越後府中海原川より東路

あておなれ 正カクに 御カクの 御カクの 御カクの
此言や、吾と、まゝぬこれなり、
神さ、いふ、秋、何、し、糸、福、し、わ、り、
皮、社、誓、ハ、な、り、
よ、昔、之、韓、御、進、教、此、時、
此、神、と、し、長、多、明、部、と、し、
り、戸、傳、い、い、

何、乃、原、中、此、布、も、て、や、
神、や、す、い、い、い、い、
これ、玉、の、大、守、相、摸、守、藤、原、朝、臣、上、牧、房、定、
れ、ま、え、る、を、速、路、し、
後、と、旅、泊、れ、波、の、あ、

と、こ、つ、八、割、旅、敏、を、寂、勝、院、と、い、
川、了、れ、樹、陰、れ、涼、何、秋、
夕、よ、い、や、し、早、れ、
溪、の、り、も、も、梶、の、葉、を、
ふ、い、し、知、ま、に、あ、わ、し、て、
よ、向、き、ん、し、く、万、代、

と、り、う、ら、れ、を、ま、
十、四、十、五、
了、通、あ、り、
内、侍、へ、
て、淨、利、

了、通、あ、り、
内、侍、へ、
て、淨、利、

池平頼れあらふと

ちりちりふねあまのすくしはも

しりあらしのあまのすくしはも

とをよして山をい川の瀬を渡してゆると

舟のゆくしりあらしのあまのすくしはも

山川の中を舟をよびてこねらゆりや

きさのゆりみらしてなまのあまのすくしはも

前れあまの上もしきうふ隊あゆむと

しりあらしのあまのすくしはも

あまのすくしはも

らくは河を舟をよびてなまのあまのすくしはも

やちりちりちりちりちりちりちり

あまのすくしはも

ゆきを越して府中へゆりしきて旅情

をかくしりあらしのあまのすくしはも

よふ又旅立相済としりあらしのあまのすくしはも

村あらしのあまのすくしはも

梢りちりあまのすくしはも

あまのすくしはも

かくして山をい川の瀬を渡してゆると

曠野を人ともい川の瀬を渡してゆると

さういふよれきうきしりあらしのあまのすくしはも

詔訪れり我うに有りし

すこし海へあはらしきことなれば

よしのりみらも祓や行まはる

重陽れ日上別白弁といふあはしうは里の翁

及戸部定昌猿思の衣襟をやくことあり

十之末の二續作はあ月祓祇

越ぬきしらとせのこはむしなる

みらとらら祓し月やちはる春

ふれりし袂踏をばしして夢津の温泉

よ二十七日傳りて詞りつゝあはる飛をり

徳ちれめ祓よまはるあら申あはして信吾保

れお湯はうはやぬ中をくじつとおむゆ

あはるし法乃嶽れ雪しときほくひりや

初てうれもくじつとあはるしはうけくあは

つらつ

からららららあはらうの初ゆ記を

あはるのこきのみとせむる

一七日いりりしゆは出湯の上なる千巖

れ石をくじつとららのちりてあはるあ

阿やそくしうらひるる高峯阿やあ

のこきしる麓の流水阿やしをいりか

れぬしうしうあてとゆりは踏をり

ひびいてふのちりり

ふねはらしむらういふれ混あふ
くまをむらくあやゆををむく

とゆ一系極黄つれ月安ふふまふなる
わらあやめぬおと帯しらす市
うたひをこむさなしむらむら
ねわて

まふあふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ

祿る月廿日あまらふはむ府長野北陣
可くしらすま晒しなれしけ野八妹のあ

をあうひ戦場いまふふふふふ
兵野ふみてりれかられいふ
をむさしすいてあふふふふ定昌北指南
ふふふて藤原弘定園本北旅し衣のふ
あて旅宿をふ傳ふうひふは
殿霜をとこやふからしふ殿から長尾隆景高陣
ふふふれ會霧申中

むらむらや竹のふあふふかふれ
うらうらにやれりしふのふ

十一月五日ふは佐野のふ橋しむらふ
あふ忠信をしらすとさふはむをふ

あれ方一すりをいかり畷何中うふ
 白雲山を冠ひしあゝ船御社此らあり
 其まていよ向ふ所の嶽崔嵬しりしあま
 しし東西北界しおろき阿はしく田は
 面くらうふ平くまらけしまなる二百北も者
 有しなりしけあこり老人あてし
 此誌を論ふるは水となくあま死はのり
 くらあゝく二三尺たるるしあをうらうら
 しりしりれりるあまみりこつれてまこし
 おりころとらりか

孫もたかくしをはたすあひし

冬にこまむみのこむるを尋ね

十二月のころしりしはむうはのり
 をこむるくちむうはをいしりし
 むらりしあむの野を論ふはうはか
 りいし千里とむのあまこひのま
 と湖日れりしあひあをしあまの
 野しあひのあま

朝のむらむらむらむらむらむら
 五ふむらむらむらむらむら

其あまの集団しりしあまのあつて
 ふゆりし野徑のむらむらむらむら
 持山

ついで朝の光をよみてゆくよしの心なる
やまのすゝもあつらふもあつらふもあつらふも
水かきふもあつらふもあつらふもあつらふも
ちりちりやまもあつらふもあつらふもあつらふも

うしろのなるもあつらふもあつらふもあつらふも
しきとふるもあつらふもあつらふもあつらふも
うしろあつらふもあつらふもあつらふもあつらふも
れと滋野宝来もあつらふもあつらふもあつらふも
よの弦月もあつらふもあつらふもあつらふも
からして朝の日又もあつらふもあつらふもあつらふも
う紫もあつらふもあつらふもあつらふもあつらふも

うして雪もあつらふもあつらふもあつらふも
とかりあつらふもあつらふもあつらふもあつらふも

と朝もあつらふもあつらふもあつらふもあつらふも
なほあつらふもあつらふもあつらふもあつらふも

亦之日よもあつらふもあつらふもあつらふもあつらふも
海村もあつらふもあつらふもあつらふもあつらふも
やもあつらふもあつらふもあつらふもあつらふも
左宿もあつらふもあつらふもあつらふもあつらふも

同十九年九月

あつらふもあつらふもあつらふもあつらふも
あつらふもあつらふもあつらふもあつらふも

五日立春

春のゆくよきとふしし〜の

同月北武蔵野北のし〜の
優待の鎮座社五條天神と戸のついで
ついでに井戸を焼ゆ

ちゆ〜て〜の長れ〜

〜の北界の雲れ下り

たぬし湯鴉〜の古ねを
〜の遠をを
〜の道す〜野梅風

薫にふれぬ野北神と〜

〜れに〜のむ

〜のむ

〜北初鳥越のむ〜

〜東麓を下総西麓のむ

〜利根入百北二河ゆら〜

〜北隼村のむ〜

〜眺雲曲のむ〜

〜のむ〜

〜富士跡の西〜

きくすく野々久日城帯勝月元ふかや
中りはくくく四城ふ山所

なまぬくのじりもくくすくすく
ふくくや日記もくくなま

亦日さくくく孫倉ふ城なまゆりふ山徑
れ某のさくく一宵れ某のほくくなま
と架

あまねくふくく後路もくくく
何あふくくくくくくくくく

あくれと鶴。思ふまいくくく霊木長松
なまぬくあまぬくくくくくくく

きくくくお地城の漢れくくく
くくくくくくくくくく

あのかくくくくくくくくく
きくくくくくくくくく

かへぬくくくくくくくくくくくく
れくくくくくくくくくくくく
遠きな化ふ城扁くくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

雲は色のこころふりしるは
まじりて雲のこころは

けしきありてふもこれ磯の上へ平常和

東下野守
常路二男

ゆるりこふさなりける心をまじり

とておろくは浪のまを笑あるに

難波なるありてふまを笑あるに

みづなるとは浪の志こころこ

流せなるふなるふ平常和ふさなりける

扁舟は海はふりてふさなるふまを建

長糸覺安寺迎見して雲下といふありて

分ゆるりて門碑遺跡なりてはこれありて

なる老木の花をこれたしむりては
あそみ花

まじりてふもこれ磯の上へ

ゆるりこふさなりける心をまじり

目られて英奈の津川を記ありては

巖頭波しきりてふさなるふまを

は

水はこころは浪れまじりては

まじりてふもこれ磯の上へ

はれしこころは浦の海よりふさなりては

ゆるりこふさなりける心をまじり

ゆるりこふさなりける心をまじり

して白鳩魚福く約しぬれこの供ら
のくらしとしてくらしぬらんや何れに
あ界れ宝迹切徳天ま一戸に則て爰をも蓮
菜酒としり深秘のりしもの由いふんれ昔を
しきても向し仰に清花

らおれと白れ清ちやうんれ
のめれ人なりや月さらうれ

うれ言奥中くらし見をきくういあま
て能とこに浪大ら然うはくうい大慈乃
弘誓をとまれし爰もくういして又光明
れなり人ふを信しうれとけんぬやまら

まらまらうみうぬふれのなまら
ふおれし何れくうれぬゆめ

聖の降ぬ寺まうく見るく屋河れてまら
のめれくうれにひもくうちてくまらうい
ひくくく少室一葉用五葉れ遺董とく
めらうしねかゆうく宿智れまゆ白記あま
うくくこれ山く松のあまう記社を編荷明
神く白狐あまもつを寺あま、佳瑞河を
門布れ叢初と嫌をも向約しは古れ源起
うめて何れ脚神とくまらういといつし
あはけ脚社とく大織冠の脚瑞産くや

なり流亭とて及意汝れ豫とねこせしれ
豫倉山是なるよしとわたりん事

けつとらりし神もまふなるす此のま
ら流のまはらひむらまのよきま

板東寺くいらりけりしとくは此のまはら
月あいらりあはれしむらまは早れ御
堂とてゆきかき古僧のまはら

ともなむとわら月あいらのまら
きらりしむらまのまら

又之浦のまはらむらまのまら
くやいらりむらまのまら

に

くやいらりむらまのまら
くやいらりむらまのまら

甲のまはらむらまのまら
入流をなむらまのまら

丁のまはらむらまのまら
くやいらりむらまのまら

二月の末伊豆れむらまのまら
湯くやいらりむらまのまら
れやうむらまのまら
まら

かきな けろろりり 紀久 さいのうま
ふらふらうふ 夕暮らら けきん

れは 六浦金波をうらり 乱山うま
く 鴻のなる 青障りらら 海を
うく 神異地 少れ 縁地 金波
玉多 稱名 ちり 律 杖 寺 昔 為
相 口

いふふ けきん けきん けきん
ふらふら けきん けきん けきん

中 竹 けきん 後 けきん けきん けきん
て けきん けきん けきん けきん けきん

殿 杖 新 下 竹 口

けきん けきん けきん けきん けきん

み 月 けきん 末 角 田 川 の けきん 遠 村 夕 立

けきん けきん けきん けきん けきん
けきん けきん けきん けきん けきん

同 廿 八 日 けきん 野 けきん 申 申 けきん
平 重 後 けきん けきん けきん けきん けきん

けきん けきん けきん けきん けきん
けきん けきん けきん けきん けきん

けきん けきん けきん けきん けきん
けきん けきん けきん けきん けきん

雲は霞ふみから神らしし一清れ
くさき葉ふりくらしし一秋のそら

陣日さくはりのちかしてまわらまれ
しるしのさくら花はひまのひらき
ゆふのまはる月まき泡音れらわらり
とあふゆるはるまきの音うしてゆや
夏ははらなやりののまのよの
しるしのちかひらきまのまの
るしるしの井を花あふ

うこころの野はあはれまのまの
るしるしの井のまのまの

七夕は鳩の井はうらな野雲永のりふふ
秋増色

まはるふらなりのまのまの
あはれまのまの秋のまのまの
初結はあはれみらまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
隅田川の期まのまのまのまの
れまのまのまのまのまのまの
てあはれまのまのまのまのまの
らまのまの

ねと新し今もみまのまのまの

あはれなるやうに神の阿さきや

九月十三日長白井戸部よりして松戸月

すみりあるやをきこみと松のこれ

ふり何れなるやの月うせ

九月盡し長野陣取小野系札ありとよ
く暮時雨

誰りてこれ秋のころれの櫛の紫れ

くらりこ山北もななくくら

十一月れ来るよ上冊のころいそに越後の山

石川 上松相模守房定二時
法名常泰旅取 とりよとらへ源房政よ

きくへて帰路とりよとらへすくさより傳

く白井れ人々饑割きよ山路雪

帰らぬこと思ひとらへるよ東路れ

山さなむら雪やふま

廿七日山さむらむらして胡きとらへる利根川

をくらりふみゆ

ゆりはむらゆれのひらむらやさるあん

浪ふらむらありの利根河

阿くれとこ玉山を越侍をして本曾路のえ

とこぶらなれる嶺もむらむらむらんとお

わい

むらぶらて中こみらやあらむら

あきふゆのしるしを神のこころに

秋

あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに

冬

あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに

あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに

雑

あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに

あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに
あきふゆのしるしを神のこころに

政老僧奇れありて 朝夕ともなすれ
とも今ハ世れ中うは 賢しく知人も解中
比叡川指して 郊うて 芥一人 府中よ 恒時
るら ちりり 一うて せううと 阿やや
こぢり 草庵を じすし 竹う 又う 竹の 山越
とん とう 一うし 阿やや 運を せり けい
あま 竹う まの 一うの 心と 道人と 解
あま 一人よ 一う 業よ け 祿を 一うた せ
うて 鳥の 葉と 一う 竹う 一う 一う
けり ちりり

老あられたと 一うの 一う 一うの 一う

はこれ禁ん 一うと 一うの 一うの

さての 草庵よ 一うして 昔の 一うの 一うの
と 竹うよ 一う 一う 一う 一う 一う 一う
一う 一う 一う 一う 一う 一う

一うの 一うの 一うの 一うの 一うの

あれハの 一う 一う 一う 一う 一う
昔れり 一う 一う 一う 一う 一う
一う 一う 一う 一う 一う
一う 一う 一う 一う 一う
一う 一う 一う 一う 一う

又 一う 一う 一う

うけつてえれししなまはらへりては
月まで照れももさるるん

かくして何れも十日清見の園見舞として
人々もなほいて行ゆらまうなほなほ
うね浪もなほあしとまよらるるらし
園れあらしをさるるまをさるるまを
はかりりちくましとまよらるるまを
ゆらゆらし何れゆらゆらゆらゆら

月なほいせれなみも清見う
なほいせれなみも清見う

あをさるるまをさるるまをさるるまを

いせれなみも清見う
なほいせれなみも清見う
なほいせれなみも清見う
なほいせれなみも清見う

なほいせれなみも清見う

なほいせれなみも清見う

なほいせれなみも清見う

なほいせれなみも清見う

なほ

かゝるものもあつたこととこれむと信見うゝ
りやまをうゝのあれ老れをみる

十六日枝草庵をいゝゝゝゝゝ弘海とて
ゝゝ紀法師の奇なと種古のりゝゝ紀うゝ
ゝゝて右奇なとれ公たゝ君ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

馬はあやうの山路をいゝゝゝゝ
月をさゝりゝゝゝゝゝゝゝ

皮弘海とて上総分ゝゝ一着ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

りゝゝ

天は人君をいゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

入道常純と云人昔老僧ゝゝ連ゝゝ奇なと種
古ゝゝ人のを江ゝゝ武飛曲ゝゝゝゝゝゝ
友枝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
昔れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たしあるやししとあるらちりさ
一山西山寺と云ふも一山寺れり
し行もつらも脚堂れりし
ふ河原もそのりしけ二三年れ
らりなしてぬもりゆりし
ねしをぬしてちりし
くらりれ日れもぬもりし
こゝちりし

さちりしぬもりぬもりのゆ
ししししししししししし

玉泉坊と云ふも二三日かちりし

了れ坊日具衛又技重治をれす
讀む奇しきしししししし
おもしろきしししししし
をれゆり奇しし書阿比先
をはらしたるも書きたし
今も知れぬもみちりし
るは阿比ししししし

おもしろきしししししし
和奇れりしししし

とゆりして遠はれ府中
しあはれ便りしししし

とらぬしな記事を井中文のむすし
けつりやういふらるるし

芝草

檀大僧都心敬

いみじきはるしとて下雪風清く
く成りてはほろひの月日乃
をいふれの中らるるし
石くしをたのむるを世歎か
しはのあま世乃みれと成て
とれまはしはれしとて芝
博深櫻門棘路月郷中
ほろひをいふるしとて
くをいふるしとて

のこけのふもすーさけな〜口山鈕樹と
と〜なりし縁乃うね〜もますく〜を
と〜〜ふれ〜い〜い〜る〜岩れんを
とふれむ〜し〜と〜る〜を
の〜や〜寺入〜の〜く〜大
乃禁に星霜年久〜と君乃室あり
う〜下〜せ〜わ〜あ〜ま〜ら〜わ〜傳
ん〜系〜を〜守〜乾坤乃外素懐地
ま〜ま〜ら〜あ〜を〜い〜い〜仁者智
若もんを〜わ〜傳〜し〜事〜く〜あ〜ハ孤者
羨し〜〜て〜や〜と〜ら〜松松なり〜い〜ら〜ら〜

斜陽をかく〜子た乃喜巖抱れ〜
歌てをのけ〜若れ延を〜
と〜と〜と〜せ〜と〜煙系腰腕〜
善鳥のう〜〜い〜子猷子矣
國王質費長〜入〜仙家〜と〜や〜あや
ま〜れ〜考〜と〜の〜の〜
や〜あ〜を〜い〜に〜斗〜なり〜本堂若〜
甚〜と〜い〜い〜と〜破〜て〜朝〜の〜小松
ん〜の〜と〜い〜い〜の〜を〜く〜翠乃尻〜
と〜れ〜む〜乃〜と〜れ〜あ〜ら〜ま〜篇〜
此の〜れ〜ふ〜の〜と〜ら〜ら〜い〜い〜

袂を志ちししといくもるー南乃山
のりくハ三終をうけーなるこの
なまらえり陰あり音のらるる城
祓さいわ門ありわらハ松梅るむれ
あとも友たよなまらえり
長河さすも陸尾花泉る音をあははる
なまらえり古橋るる厚嵩斜りて
もらえり虎溪もかまらえり
るる平原野るる晴るる馬山るる
秋のむをおるー翅のるれ夕カみ虫れ
うらうら勝をまらえり少ハ大嵐聴るる

雲霧天乃肌よわこの不し雨をり
しし不ししれ驥龍乃塙地あり
らられ掃るハ田ありらや秋孤のむ
なまらえり小軒をなまらえり
里の子あり音をひらふ牛を連て
本らし翁をむりて陽まの山音を
ありあいのすなまらえり夕陽るる
よまらえり白浪の月を待る新世俗の
音をあらえり文をまらえり花洞る入る
音をあらえり文をまらえり交相の音を
感懐意後誠ハ瀟湘麓山乃長れ雨し

こゝろもよのれ席

曰

芝草乃石の朽葉ももむろひは花てとこ
なご事れゆかつゝあさなも 露はゆへ
こも席乃とこちをぬるをさゆひは
こころもれもあはれゆへは事
あふくちまはけいけいもあはれは
あふくちまはけいけいもあはれは
あふくちまはけいけいもあはれは
あふくちまはけいけいもあはれは
あふくちまはけいけいもあはれは

さむくし序

曰

世乃中れらるればさむくし物候のちりり
物もさむくし和亭子ありしとれ周さるるも
さむくし志のいあらはあはるるの
乃ちさむくし伝はるるも是を
もさむくし伝はるるも是を
みかつたもさむくし人の程も八位
事をもさむくし伝はるるも是を
なほさむくし伝はるるも是を
又さむくし伝はるるも是を

とて流流約るなり
とて流流約るなり

杖素拾葉集卷第二十二

種玉篇次抄序

宗祇法師

光源氏乃物徳卷ればわく一帯をあれんを道
くこれの得るべきところか不しと申すわ
をうかふ中物乃をよる字治権、重とまを
又巻こそくを雜部しと分別しこそし
ぬくかまひうふ人乃うらうらんらるるまき
しあははあ乃石峰をらうらるるをちひく
わさ乃あまきかき事る約述え管
見のそわいをうらひはは記つを約る

百人一首抄序

同

右百首ハ系極黄門小倉山莊障子久紙の
 和奇るりしこれ世より百人一首と号する
 りし是をふくむ事なるは凡そ新古今撰
 定家卿の心よりその故奇なるいふ
 一り世をわこの民をいひく教戒のうゑ
 こととれん事を極めて花を枝葉をも
 命とゆふるとい集は倫に花をりて
 美と名まはさるるも本意をかたさぬら
 一ふれと奇の心ありてさるるを口傳

心はゆるい今百々の奇をえりてついで山莊
しや並ぶもののうけ撰のなきはなさ
してなをさしゆくゆるかり是後後編
河院御時勅をうきあまりりして新勅撰をえ
段りふは集の心げ百々とお回くるし十
分のうち實は六七分花はこちかゆるくこつや
右今集は宛実相對の集なりとて後撰宛をこ
ふにとりや拾遺は宛實相違しつゝとて
師説ゆこれ一巻一集の建立をきて
時代の風をとさくるくもさしし及新右今集を
と隠教國よかわく上皇あめめらるはり
あ

けいしるハ師心とて後悔の事けさるる
はとも黄門のふれり作るけ百々も
人致のうちにいりやくかひよめそめし又さ
りふ作るともみくをともゆるし不審のしよ
や從定家のふせ人のかよふりけれはるる
し又右々の奇蹟教をししはゆるりて世人
こいさくともさしゆりぬれあしとて
世の人なりともしゆるりてはゆるりて
あつちとせにあらはるるしとて世のし
とともあつちをいりさるる人の名巻あつち
あつちをいりさるるしとて世のし

美門と申すはあまのこゝろに
世人のこゝろをばなすに
とて言ふもいふに
よる為家との代り
とて言ふもいふに
あまのこゝろに
事なるもいふに
よるに
あまのこゝろに
二條家乃骨肉のこゝろ

美門と申すはあまのこゝろに
世人のこゝろをばなすに
とて言ふもいふに
よる為家との代り
とて言ふもいふに
あまのこゝろに
事なるもいふに
よるに
あまのこゝろに
二條家乃骨肉のこゝろ

奉納住吉連歌序

同

いよゝゝ冬はうきあはれはなまかりん
月の影かゝるしうきあはれはなまかりん
の地ねのしほはなまかりん
うきあはれはなまかりん
あかしのうきあはれはなまかりん
いぬのうきあはれはなまかりん
あかしのうきあはれはなまかりん
あかしのうきあはれはなまかりん
あかしのうきあはれはなまかりん
あかしのうきあはれはなまかりん
あかしのうきあはれはなまかりん

بسم الله الرحمن الرحيم
الحمد لله رب العالمين
والصلاة والسلام على
سيدنا محمد وآله الطيبين
الطاهرين
الذين هم خاتم النبيين
مؤتمنين
والسلام على
الذين هم خير البرية
والسلام على
الذين هم خير الأئمة
والسلام على
الذين هم خير الصحابة
والسلام على
الذين هم خير التابعين
والسلام على
الذين هم خير المجتهدين
والسلام على
الذين هم خير الفقهاء
والسلام على
الذين هم خير العلماء
والسلام على
الذين هم خير الأئمة
والسلام على
الذين هم خير الصحابة
والسلام على
الذين هم خير التابعين
والسلام على
الذين هم خير المجتهدين
والسلام على
الذين هم خير الفقهاء
والسلام على
الذين هم خير العلماء

بسم الله الرحمن الرحيم
الحمد لله رب العالمين
والصلاة والسلام على
سيدنا محمد وآله الطيبين
الطاهرين
الذين هم خاتم النبيين
مؤتمنين
والسلام على
الذين هم خير البرية
والسلام على
الذين هم خير الأئمة
والسلام على
الذين هم خير الصحابة
والسلام على
الذين هم خير التابعين
والسلام على
الذين هم خير المجتهدين
والسلام على
الذين هم خير الفقهاء
والسلام على
الذين هم خير العلماء

中ぬがつきの日記

或曰白重記

藤原基綱

又至孝の道ハ異域の唐竟虞舜とこれをも
とつてハ胡の明王聖とて是を純とて多
やいとゆゑ親氏の獨考も切利の安居もや
のありしれ徳をといひ智叡の垂沛ハ長安の因
塵下の御祖の御志とてくくもあか
しむる所ののちをいふ(あふ申も孝を
いふもゆるゆゑなる文をいふも)下ハ
いふもやいふも延徳二年卯月下乃
八日ハ必母仙院の三四の聖忌にて其日

ふヶ日れ御八誨をさるる御禁中としてのあらう
と村上天皇天曆九年正月皇太后穂子御由
り八袖宸筆をくく九禁焼焚を
いさきてさるるれまらるるの夜にて乃
儀ハサト二十ヶ度めとらるるや天曆を保
安元元曆これ母后の御追善るれ先嚴と
後禮といとあされよかこまらるるなり
やあり一應仁の礼をさるるた余子のるる云
私諸家の文書記録と云慶長烟のあら一室
にあり佛圖僧舎の経論聖教と却大慶凡れ
日とつ道よりをさるる萬牛の中一毛をばるる

かこはして舊例と先規と見よゆきてはま
いさるるるるれ禁闕のゆきと新堀昔
志のぬれ病をけ東海の荒一巻くありれ
さるるをさるる貴と婦一まらるる朝儀乃編
よみ一せよと武運のあら一く末の世とる
りさるるるるのこれと佛と新らるるて月
日と道家のこらるるや然るるいゆとさるる
をいさるるるるれ南京の碩学を撰一
北嶺の雄とる一て嚴儀の山を遊るる
り外一八方様の編命とをさるるて
よ八十巻の戒行珠とみるるる徽心のりこ

こゝに中納言一室を御殿のかきし法席
の移し先刻よりいふをふりあせれいかさね
て志氣は及まねしうゝ係し掃圓以下その
時の一室をくまんの次子を作をさしるはそ
ま川堂上堂下の莊嚴をくまの第一のさらけ
るれとおふく二年月く妙道なるさばを位
けく金中こくは儀清涼殿の東西六ヶ間く御
簾をくまのくまをくまのくまのくまのくまの
まてくまのくまのくまのくまのくまのくまの
一の間まのくまのくまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの

かきし一室をくまのくまのくまのくまのくまのくまの
間一室をくまのくまのくまのくまのくまのくまの
れ釈迦の像をくまのくまのくまのくまのくまのくまの
かきし一室をくまのくまのくまのくまのくまのくまの
るく西顔相好うまのくまのくまのくまのくまのくまの
の赤旗檀の清涼寺のみをくまのくまのくまのくまのくまの
てくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
螺鈿の香花れ机一脚をくまのくまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
机二をくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの

らてんれほくまういおし錦を敷て御経一巻
十巻しうまりれたるし燈籠を敷つ九枝の籠
光あさうふして八講の菓座くりりり
かの根中堂より平安才一れみしものつ
うまねん千載を盡の焼も光とかん
心地と大凡道場の具なりしは
なう條期者略のりともまらうや正面乃
同乃小面より高座を敷川高座の東より又机を
敷て御経供養の時威儀師は経を
とてしきり又高座のいしに礼盤二脚
は多川母屋の底よりを

花鬘燈明

にうやま教燭香煙しるしくあしは
ふ仏の御圓よりいやふ又東の底の正面
行香の机を敷川唐錦の折敷をくしく金
れ大舎を敷しるしく南より散花の机二脚
を敷て多し系しるしくみさるる物さ
り此を管しるしくしるしく川
みうさねてしるしく又行香の机は西より錦は
敷しるしく机を敷て最文飾しるしく
佛布施しるしく道場内外れしるしく
れは簾しるしく東西より北面の
敷て二枚
しるしく
東上
南面
同
南才一二

中將實智朝臣執業を授けし奏書を以て
五ノかの里亭にりしむる討をすしとてお
産頭中將日時勅文を以て僧侶を授けし
を以てた少弁定秀を以ててこれとす
多母御孫文ハ冬後或ハ大補長直草進して九
府之れを清まらり凡この清書ハ入本の名筆
累家の堪能を以て求られ次折家清花を以て
此人多寡人ハ御孫を以ててや安充して月時
殿于時右大臣元應ノ後山本九府実泰云應安ハ是心院
関白師良云應永ノ後三條入道相國実泰云あるの唐
中々々やこれと治暦元年九月御八講経終つ

于時奉行職事頭九中弁 記云御承文式部大補實經朝臣清書
上卿内大臣師房云便可書之是等年中之中長保
御八講之時上ハ親父故中務ハ親王具平清書之
例之云ハ此の紀の云ハ又能書清書也是等
ノやいさばとれ人ノて平政のよる一也と云
かこむ當日己の刻こりに兼仕の僧侶来志ハ
アハあつさる云卿九大臣實深云勸修寺大納言教秀源
大納言雅躬久我大納言豊通為中納言徳光中山中納言
宣親姉小海宰相基經多アハ法王ハ殿上にはく律
御之上奉新職事院人控九少弁守光を以て事
の具名とすらる具とす

土中を仰せ取来てまうしつ次中をりせし
 上つた少弁宣秀を右て種を仰せ出れ友人
 くれをうつこのありに也御此五衣
簾中さて上つて
 次手は殿上をぬらして上の戸をいへ、南東は其の
 ことを居てうし入るも忌免これよこせからて
 裏春持明院
中将雅俊聖子
中将等胡后出后の座より但春
 春中将ハ上首ありた府家礼ありよもしての
 忌免の後につさゆしや公の座より忌免は院
 兼東院僧正兼四
任四東山院僧正任四
公惠西室僧正公惠
以下
 威儀師澄嚴と先約をいきて高遺戸の菅脱を
 たりして次手は赤みほきて南東の座より

正面の向をいきて各座よりはく威儀師磬をう
 てし公の座より出后赤みほきて熱礼噴下をいきて
 義人の弁宣秀少納言和長左右の堂童子の座
 をぬらして花苜をいきて僧の前よりはく行通終て座
 に入りて花苜をいきてしつれ机より退
 いら西室僧正兼四
任四の誦師より高座にのり
 表白の作法を終て同者先什僧部兼勝院
因座
 たりしつて中観福の意申道をして宗とて
 とぬ又之禱宗の念法花の教をハ遮那釈迦の中
 よいつてしつてしつて同答刻をうしつ次院兼取
 人の座よりはく辨勝再はしつてしつて種を仰せ

公卿以下皆をとり六種回向呪歌之礼をいぬり
もて、行高の義ありて心をものく、劔をとり、湯を
ひきて、座をぬらして、机のりくは、同時をひき
奄をとり、公卿一人不足、甚長胡信末より、弘
庇をわたりして、水の才二れ、同をかく、山、雪、河、下の
おをとり、こめて、黒戸の南の美子、西と南面、
端をひて、上つて、次方に、さだの石をもち、し
傍、流、清、涼、殿の庇、水と東面、列をもち、つ、
に、も、こ、ま、い、も、を、堂、中、に、列、を、こ、こ、して、南、乃、書
戸、鬼回、ひ、ひ、と、南、の、美、子、れ、お、后、の、座、れ、西、に、端、
ひ、く、り、て、又、お、湯、を、こ、こ、と、さ、だ、の、机、下、に、湯、を、こ、こ、

次方に奄を返して、後座次諸僧座より、こめて
禊なく、次方は退下、徒僧、東階より、お、か、り、
東座、書、炉、箱、お、を、撤、し、こ、こ、座、を、ぬ、ら、し、湯、を、
一、和、の、劔、を、手、後、より、こ、こ、り、て、こ、こ、り、
て、退、く、禊、を、く、夕、座、り、こ、こ、り、こ、こ、り、
に、殿、上、つ、つ、と、夜、の、法、向、儀、定、一、和、の、西、乃、美、子
れ、色、に、佇、立、し、て、殿、上、に、は、は、ら、次、後、一、人
基綱、ん、ら、り、と、け、を、ゆ、こ、こ、の、を、ひ、ひ、上、つ、月、の
中、を、奏、せ、り、及、く、次、や、り、て、并、せ、り、て、禊、を
仰、を、次、方、より、系、上、を、義、あり、座、を、同、く、夕、座、れ
講、師、実、珍、僧、都、伯心院、く、授、少、僧、都、南松院、回

乃瘡了つきて翫を日まてとひていさく孫
院ハ釈迦の分身と謂し一やと又法苑了却登
十地をあり候やとこの支那又漏義をほく候け
諸師ハ唯密の師迹して教宗ハ起立代ハ如と
あさしく底をゆるるもと孝道の慈母に
自身の執心と喜するもや同志とさほくは
身をほくし一際をあまて疑難をしつと陳
善もさくさくさくさくさくさくさくさくさく

才二日七七 朝夜れ諸師眞實已請眞福寺 住持 ころや

檀甲れ如教家うまて高居よとくじさほくさくさく

なく同者延壽大法師東大寺 住持 二宗の智者延壽

法法を飲もつるハ五漏五漏の中にかいつ建りや
と又佛果の障ハ因位の智をゆく断せらやと
ぬ此清濁のあ人の法相ととせととく三端とと
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
とほふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
因位の智と唯佛ハ佛の境果をれん凡心悟意ハ
て飲解を(き)くともねと文と句ハの教ととと
とくもして感悦をせしころや唯義れたよ
凡心悟意ハ自宗の義端をれんさゆくハ難陳
證誠をいしと不平よととととととととととととと
一序の説義兼四信ハ譜代の名宗當時の宿徳とと

う(法中の有識も比類るに中うを結ぶる任因傳正
ハテ下に微弱の比よりし学業の博とある多ありく
て云武の御教とては奉勅の時を毎夜自宗此門
の稱羨よありたり一人といふじや練磨薰快年
多きとある當時の所作をやうきりく神りして
めらる(まじりや次の所ハ賢心已傳延曆寺住学生 松禅院 旨即せ
はしこ傳して檀甲をくぬ製法とみづつる記か
と一人傳し大法師源泉延曆寺住学生 實苑坊 同者の因座
よもみく因座師者最初終親の時久心二法の事
にも先いづきを親もくくやと同次ハ西方の淨院
如来の教方の應所かて教えしてよもし二種の同

題教刻の長座に及ぬ多心二法の疑ハ天台一家親
法に相違然の事候して廣大深遠なる義福とて
尸(まじり)や淨院の教意ハ普導一家の三ハ別建之
の宗旨として系教中道の門よりハ化還をちをよ
にもくま(まじり)と名目といひ欣慕の由といひ
教念と三心即發得のうへしてハ(まじり)とてまじり
しり(まじり)や疑滞の智弁文殊大士を座談
りち富多那尊者と座麻をとり好よりんをそかり
し(まじり)の云彌申出門大細宣流 冷泉中細政

わ、華凡記跋

同

此一帖を想箇載公の述作と主ハ早下れ心源
として息をいしぬ一見をゆつふぬとけり
色してみゆふも日々と内の御舎をてい
記すり系珠一わしとてんくくまぬか
てりりぬは一かとて當時の連歌のあ
と海への津波はなるとにやくとく物
あつらつきのうらまゝなるべし便
くふことゝなれえらる物とてそ
りせに教後をへるり作あり

後乃師會の時懐中してそ素やうかひ
く〜〜感一任らふやうく柳紙を這く思
息の中將よす〜〜と申すの作く大
く〜〜とふぬ〜〜とすなよ〜〜と
か〜〜とすつ〜〜に〜〜物
う〜〜の向敷〜〜の巨着い〜〜當時の
束竹の文字を〜〜といぬ〜〜け筆法も
馬相如の書を〜〜賦の〜〜を〜〜
いま〜〜世〜〜の〜〜の
詞の〜〜良材の斧と成る〜〜の
〜〜の〜〜の後と〜〜物〜〜由

未とちろよよとて新編書に合するのこ
け〜明應丁この書は束とす〜〜

つづく記の序

法橋兼載

あゝの疾るふりの院はあふ童歌のいとゆり
おろかりしむら。中あも和弁入ぬふくんは
りも信をまうこそこゝ連歌といふとあや
ふとるこゝしむら。ちむりともくたよめてあそく
れむらとるしむら。のぬむらにまはるしむら
りに信坊（ま）りむら。こゝの道はあふく
るまぬ。まむら。まむら。まむら。まむら。まむら
まむら。まむら。まむら。まむら。まむら。まむら
まむら。まむら。まむら。まむら。まむら。まむら
まむら。まむら。まむら。まむら。まむら。まむら

つるつる葉の末をあら〜りゆらゆら
いこも〜とるれと又ゆらゆらみるはら
多〜ううてもみら〜のゆる〜か
や〜にき〜射ゆる〜

連勢比况集序

同

又連勢ハ哥〜とゆ〜其感悟〜と源
〜る紙〜氷の水よ〜い〜あよ〜し
〜あ〜ゆ〜次これ〜りて君と臣も心とり
ふ〜てこれ〜てあ〜い覚〜と〜し
同〜てこれ〜あ〜と宗祇法師といふ
人あ〜と柳公乃流をうけ〜と教公の凡を
彼〜んと〜みちを〜と〜と〜と
な〜ゆ〜あ〜先を〜か〜い
や後学〜を〜と〜不敏〜とい

しるくこれ道なるを記しとくしと乃教をう
まゆりあふ時九手花乃もにまはしる
く書らししとる心とひあつたは子里は彼
のうへ旅のありれとゆふとあまんと
ちのまゝくしてとまひゆるるゝとくぬ
志しれども會席のゆるら肉れ心誓古前
句のゆるや一白れ志してよまふとておにま
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
ひはまねとまか一ゆへにけあやひのさか
てあか、一とまひゆるに記若以譬喩得解と
いへば紙るるるやをのらとてあよふ今とれ

わらこをひのく天よやぬく海よをいぬ
くまよくけらなぬ一て末乃世乃傳のゆむ
よ曉のあつことまようのゆるくに院と
きて業にあつり一書とありて友人よこれ
紙一か便友人これを一候一てとるら連歌
比況集とるゆく後生をさる一といひむ
まよふとありてあふ人のあふあもあつ
わらこをひの曾鈍のいふとあつとくくを院
ぬらとるるるるるるるるるるるるるるる

多良政弘つをうらふ和歌辞

同

あーゆれ露ハ夕乃風一のちりるくよしの
いるつまハ曉の云よとくまふゆりーなく若乃
菊をりくあそひる如枕を巻せー人をこれ
むーかこいせよと成ませり常るさ世の消息今
はーかとらくもさあ。るつよは似こりまにた京頭ねん
よーあまこの酒飲ーあうるあーの朝臣かり
きりまうりこことと戸帳の内よせくらー勝とを
子里の外よととり人乃あまをそ名よくまれ
うーむらさくのこあー次やまこと葉よんは

物事とありとこれをもゆれさるものなるは
あゝ次第よ人のとくつる大下念誦をいふ
る一關を寺莫巖和尚よまてとくくのう
在世と勅られゆ〜くも焼香誦經をして保
壽寺双叅和尚大慈院西湖禪尼とて始とて
徳寺徳山の僧を可となくまゝに強教のひき
寄ふこゝろを疑ふ〜ひのよとわし身にむき
殺す人の人の友の衣〜やつまゝ申し家計絶
つゝ別駕のあふ〜らけも〜とて法
まよふ〜後何れ〜は別長〜とて
〜とてみま〜文母ま〜神位牌をとけら

てねり渡りま〜みふ人海にきたあ〜
は〜引馬と長黒と〜
をせら黒黠と〜松九門尉弘圓周在郎武康
先と引町野四郎弘風を刀と〜安富集人
枕弘貞頼負のふ〜其外の役者もゆ〜
〜ひの給〜事多〜
はぢらゆ〜して海山の中にかこめ持ゆ
て皆走〜と情〜せら〜の〜
らふ

あ〜の〜君といふ
あ〜とみる〜

山崎の稍文付海のておと——うらふうらむ
ゆらとあり道ま——

神をうけ神のひまふたこのふらを

ま——ちや室より時ある——ん

時——あれも田うれ梢のくれる井を

海乃神をうけ時と——るま

かく思居るまのり——受乃給れ口をさむいといふ

ま——せまひまむい入道た大信後、ま——

あこの人随ひつるまともなるい

い——ま——ちやむらちそつれ——ま

神のまい物——中の——くれま——

よまの室をま——ぬ比く物

山——のま——紅葉いづれ人乃

神の子——ふをう——とぬま——

又の日は殿より別駕の亭へ道はく、いふ妙経

乃景紙に跡地の宝号を冠し、ま——くま——せぬ

うま——和哥

ま——るに教し訓——月日を思ふにも

ま——をのるう——そつと後さうあな

い——む——うらまぬのるま——いち

い——ま——あ——人ま——いぬ

あ——あ——ま——ま——あ——ま——

るをしとらひーあこつふよ
 みつせ何人をららしとては(ま)
 くの氷萱のまゝーあこつせ
 若知識の詫月とれゆるゆとらし
 絶わくまはらるる奇のちを結
 ちぬとるーとあーかこつ
 新撰菟玖波集ははまをわやうれーあこつ
 ちぬくーれを改りまはら
 君お代よりけ玉を納よ
 かやうーはまらして贈和ーまらあこつ
 ちぬくーとあこつあこつーとあこつ

とちのくーのいあれと国六字と上にあこつ業
 ちぬく
 るれおまらるる逢月はまらあこつにまらぬ
 家の神をかりーあこつあこつ
 ものぬの道とあこつ和哥の浦
 浪と人おこつあこつーかこつ
 あつこつあこつあこつあこつあこつ
 みこつーやあこつあこつ
 氷萱のまゝーあこつあこつあこつ
 ちぬくーあこつあこつあこつ
 ちぬくーあこつあこつあこつ

とハ海乃玉をほくあるか

ふ ぬり記臨王たるくお記をわを記

ふとねはうじ君とこ乃まこみ

形ぬー正任法師ハ若き時よとふれうらわ
次痛れ麻終の延よとて信(ま)りけ款にんち
も例るぬりーしてせうそこれ治ー

くろーしもる。うきーから海ハ

るこみ新しや折もすも人

返ー

る記新しう種ーとともし方とんま

う方たのーくい海とほ(こ)

又其比尾知依後武親人(も)て墳墓
くやくまらふ(こ)ー。ゆて秋風といぬ記
道ゆ(こ)ー

いぬはーちをまーまる記人

くらわ種色のと次のーせ

及昔靈け道にん(う)ゆまきさぬハハの久ま
てみゆりま祿ー多いー和奇のま連奇れ
抄(も)もみゆりにけても唯将老年後一瀧故
人文といぬ古事まてうおりのむさる押けまわ
棠に(も)くま(こ)い(こ)ー就られー中(う)梅
花(も)み

玉—わやと返答しあひあふりきり

るさくんとすまやあいのむらうえ

やまきおひ—に右相福寿の御哥

るに人のちて—うあふくこまて

みる—んものも庭の梅うえ

あつゆう——就傍中務巫道師流傳—を

ほしき—し一紙おれ中も見あくるそり

うら

あまのこくつかあまのこく—にまこは

あまのこくあ—にるれああまのこく

か—は一日教らるる—うつこめてを月きふを

限にぬめ持経の次—十三佛の名号と百萬の
うまにまくとま歌ゆは—てま向ゆりぬね玄綺
結まふと讃佛宗の因と成るを—

何人

あつ月もかふるに秋の別くれ

い—のきりまてまじまゆふあ

あつ凡—お花も神やあつらん

とまららに—あつあつあつ—

うまよの—あつあつ—縁乃ら

まやに—あつあつ—らりや

山水—あつあつ—の—あつあつ—

あ じ う き ぶ ぬ

うとね水乃し波ぬきね
 うつら舟さくつら波河風は
 うねきまのいぬうきと
 ちかぬまのたの本れお日かきく
 やそもあなひうのうきか
 かりまも田苗の居やうらうん
 じつを月のくまにあまの
 にくひりるまきと海あ
 ゆうひあまひまのうき
 ほのあまのあまのうき
 ありまにあまのうき

じつを月のくまにあまの
 にくひりるまきと海あ
 ゆうひあまひまのうき
 ほのあまのあまのうき
 ありまにあまのうき
 流水をぬき一月のまき
 かつらうきつらうき
 つらのやうきつらうき
 るあまのうきつらうき
 きつらうきつらうき
 じつを月のくまにあまの

か
ふのふらふら後まつれ縁のふら
こ板ぬく月をひくくあるまじく
縁をく竹のるいくまの砂地
ちくくもぬく秋月をくまのまじく
さくも縁をぬけてまじくひくれ
うくもまじくひくの縁をぬくまじく
ふにあつたれて人やまじくひく
はもあつた毎くもまじくひく縁
つくもひくひく年のひくひく
水落くひくひくひくひくひくひく
古時とひくひくひくひくひくひく

く
きくくくく月とまじくひくひくひく
あつたひくひくひくひくひくひく
さくもひくひくひくひくひくひく
はくもひくひくひくひくひくひく
やまじくひくひくひくひくひくひく
くわのひくひくひくひくひくひく
白髪とあつたまじくひくひくひく
ゆくのまじくひくひくひくひくひく
縁のまじくひくひくひくひくひく
くもひくひくひくひくひくひく
まじくひくひくひくひくひくひく

こ　　う　　か　　う　　こ
う　　ふ　　さ　　ま　　ふ　　こ　　う　　け　　ま　　の　　と　　も
う　　け　　ま　　め　　水　　さ　　ま　　ま　　い　　る　　明　　く
洞　　江　　を　　舟　　の　　い　　け　　る　　る　　の　　秋
さ　　れ　　ま　　う　　ふ　　れ　　の　　も　　御　　さ　　り　　み　　ま
は　　ま　　ま　　の　　な　　り　　し　　た　　ら　　ぬ

